

表附帶狀況之日語感情動詞 te 形

劉怡伶

東吳大學日本語文學系 副教授

摘要

本研究目的為記述表附帶狀況之感情動詞 te 形特徵。比較具類似語意之副詞成分後，發現本形式有以下三特點：a)被修飾之述語動詞所表示之動作具控制可能性，b)述語動詞所表示之動作是動作主於某心理狀態下自然產生，c)當表正面語意之感情動詞使用時，表該動作之施行乃出於動作主本意。

此外本稿亦透過分析表附帶狀況之各形式之共起特徵後，了解到日語感情動詞，除少部分動詞外，其餘皆為活動動詞，由此可知透過副詞成分用法之觀察記述亦有助了解感情動詞語彙特徵。

關鍵詞：動詞 te 形、附帶狀況、副詞、感情動詞、活動動詞

受理日期：2013.08.29

通過日期：2013.10.26

The Attendant Circumstance Use of the Emotional Verbs

Liu Yiling

Associate Professor, Soochow University

Abstract

This paper describes the characteristics of the attendant circumstance use of te-form verbs. After comparing the composition of the adverbs with similar meanings, this paper finds the following three characteristics of this form: 1) the action exerted by the actor has the possibility of control; 2) the action is naturally produced under certain psychological states; 3) when using the emotional verb with a positive meaning, the action is the original intention of the actor.

After analyzing the common characteristics of the adverbs which express attendant circumstances, this paper finds that the emotional verbs of Japanese are mostly active verbs, with the exception of a few. It is known that observing the composition of adverbs can facilitate the recording of the characteristics of emotional verbs.

Keywords: te-form verbs, attendant circumstances, adverbs, emotional verbs, active verbs

付帯状況を表す感情動詞テ形

劉怡伶

東呉大学日本語文学系 副教授

要旨

本稿は、付帯状況を表す感情動詞「て」形の特徴を記述することを目的とするものである。類似した意味・用法を持つ「-ながら」「-たまま」と比較した結果、この形式は、a)制御可能性のある動作を行っている時の主体の心的状態を表すものである、b)主体がどのような心理状態の中で自然に（必然的に予期通りに）述語の表す動作を行うかを表すのが特徴である、c)＜快＞の心的状態を表す感情動詞「て」形の場合、述語動詞の表す行為は主体の本意によるものであるという意味が派生する、との三つの特徴があることが判明した。また、本稿では、感情動詞の時間的性質を分析するために、付帯状況を表す「て」形、「-ながら」、「-たまま」との共起制限の違いも考察した。その結果、極一部を除き、感情動詞の殆どは活動動詞であることが明らかになった。

キーワード：動詞テ形、付帯状況、副詞、感情動詞、活動動詞

付帯状況を表す感情動詞「て」形

劉怡伶

東呉大学日本語文学系 副教授

1. 問題提起

感情動詞¹「て」形は付帯的な心的状態を表す副詞的成分²として用いられる。例えば(1)(2)では、主たる動作「待つ」「言う」が行われている時の主体の心的状態を表している。

- (1) 大学に帰ると、友田先生が心配して待っておられる。(井口 潔 2003『ヒトにとって教育とはなにか? : 心の行脚』p. 253)
- (2) それを見て、「被害者の怒りや悲しみはどうするんだ」とジャーナリストが怒って言った。(「BCCWJ」³)

また、「-ながら」と「-たまま」も付帯状況⁴を表す形式である。感情動詞に後接するこの2形式は感情動詞の「て」形と同様に、主たる動作が実現する時の主体の心的状態を表すことができる。

- (3) (略)メアリーがもどってくるのをケリーといっしょに心配しながら待っていた。(「BCCWJ」)
- (4) その日の昼過ぎ、由香里は怒ったまま家を出て行った。(「BCCWJ」)

しかし、感情動詞に「て」形が後接する形式と、「-ながら」「-た

¹ 本稿では生物の喜怒哀楽、好き嫌い、高揚・落胆のような精神状態・心理作用を表す動詞を「感情動詞」と呼ぶ。詳しくは3節で述べる。

² 本稿でいう「副詞的成分」は、文の成分のうち文の表す事態の成り立ちを修飾・限定した付加的な成分のことである。品詞論における副詞を中心に作られた成分であるが、形容詞連用形、動詞の連用形（「て」形を含む）も同様の構文的機能を持っている。また副詞節も文の表す事態の成り立ちを修飾・限定する機能を有するものである。例えば、「首を傾げて考える」では「首を傾げて」は述語「考える」を修飾していると思われるが、本稿は文の成分の研究と位置づけているため副詞節を考察しない。そのため動詞「て」形を含む節を扱わない。ただ副詞的成分と副詞節の用法は連続的なものであることを認める。

³ 「BCCWJ」は国立国語研究所が開発した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のことである。

⁴ 本稿では、日本語記述文法研究会(2008)に倣い、主たる事態が成立する時に同時に付随的に成立している同じ主体の状態・状況を「付帯状況」と呼ぶ。

まま」が後接する形式は意味・用法の相違があるが、3者の相違について記述した先行研究はない。

- (5) 「ええ、{喜んで／*喜びながら／*喜んだまま} ご一緒させていただきますわ」(「BCCWJ」⁵⁾)

また先行研究では少し触れているが、感情動詞が付帯状況を表す「て」形、「-ながら」「-たまま」と共起可能かどうかは、その語の表す意味によって制限される⁶。共起形式の考察を通して感情動詞の語彙的意味を捉えることができると思われる。

そこで本稿では、意味が類似している「-ながら」「-たまま」と比較し、付帯状況を表す感情動詞「て」形を記述すると同時に、「て」形、「-ながら」「-たまま」との共起の考察を通じて、感情動詞の語彙的意味を分析する。人間の感情は抽象的なものであるため、感情動詞の正体をどのように捉えられるかは学者たちを悩ませてきた問題である。本稿では述語に用いられる感情動詞に注目している先行研究と異なり、「て」形、「-ながら」「-たまま」の前に出現する感情動詞を考察することにより関連の文型やその語彙的意味を記述できるとと思われる⁷。

本稿の以下の構成は次の通りである。2節では先行研究の成果と問題点をまとめる。3節では分析視点と考察範囲を述べる。4節では付帯的な心的状態を表す感情動詞「て」形の特徴を考察する。5節では感情動詞の語彙的意味を述べる。6節では今後の課題を述べる。

2. 先行研究

本節では、まず付帯状況を表す動詞「て」形、特に感情動詞の「て」形に関する先行研究をまとめる。次に感情動詞の語彙的意味に関する先行研究の知見を概観し、検討する。

⁵ 本稿では、用例は実例の場合、括弧内の筆頭語を除き斜線の後ろの語は筆者による。また、出典名のないものは作例である。

⁶ 先行研究の記述について詳しくは2節で述べる。

⁷ 本稿では文型の特徴を記述すると同時に語彙的意味も考察するが、それは、文法現象を解明するために語彙的な問題も考慮する必要があると考えているからである。仁田(2010)も同じ立場である。

2.1 付帯状況を表す動詞「て」形について

付帯状況を表す動詞「て」形に関する先行研究が少なくはない(南 1974、1993⁸、成田 1983⁹、益岡・田窪 1992、加藤 1995、三宅 1995、仁田 1995、2002、内丸 2006、吉永 1997、2008、吉田 1997、2012 など)¹⁰。先行研究の記述をまとめると次のようになる。

(6) 付帯状況を表す動詞「て」形の統語的・意味的特徴

- a. 主節の表す事態の付帯状態を補足説明する(吉永 1997、仁田 1995、2002 など)。
- b. 継起的な意味を内包している(成田 1983)。
- c. 動詞「て」形と主節の表す事態の主体は同一でなければならないし、主節と動詞「て」形の事態は同一時間内にある(仁田 1995、吉永 1997、2008)。
- d. 主節に意志動詞が用いられ、文末に命令・依頼を表す表現の使用が可能である(成田 1983、加藤 1995)。
- e. 日本語の従属節の中で最も高い従属度を示す(南 1974、加藤 1995、吉永 2008)。
- f. 「て」形の動詞は、「動作持続」または「結果持続」の「持続」を表す(成田 1983、三宅 1995、吉永 1997、2008)。

先行研究の記述が妥当であることは次のような例から確認できる。例えば(7)では、動詞「て」形は主節の事態「本を読む」の付帯状況(「いすに座っている」状況)を表しているが、成田(1983)の指摘のように、「いすに座る」という動作がなされた後、「本を読む」という動作がなされる、という継起的な意味も内包している。

(7) 本をいすに座って読む。(成田 1983 の例(9a))

⁸ 南(1974、1993)では、「付帯状況」という用語を用いていないが、本稿で「て」形節を「副次的な動作で、主な動作、状態のようすなどを描くもの」と特徴づけている。

⁹ 成田(1983)でも「付帯状況」という用語を用いていないが、考察の対象は動詞「て」形の副詞的用法で、南(1974)の4段階のうち、最も従属度の高い「て」形の用法としている。「付帯状況」を表す「て」形を考察したものと言える。

¹⁰ 仁田(1995、2002)、吉田(1997、2012)では本稿でいう「付帯状況」のことを「付帯状態」と呼んでいる。

また(7)からも分かるように、この用法は、主たる動作に付随する状態を述べるもので、動詞「て」形と主節の表す事態の主体は同じであり、両事態は同時内にあることが特徴である。

次に、(8)(9)では動詞「て」形はそれぞれ付帯状況及び並列を表している。この2例からこの2類の動詞「て」形はともに命令表現と共起できるが、付帯状況を表す動詞「て」形は並列を表す用法と異なり、モダリティの作用域に入っており、従属度が高いことが分かる¹¹。

(8) [自転車に乗って学校に行]け・こう。(吉永 2008 : 11)

(9) 健康の為には、規則正しい生活をして[暴飲暴食をする]まい。

(加藤 1995 の例(31))

更に次のように、付帯状況を表す動詞「て」形は「-ながら」に置換可能な場合と、置換不可能な場合がある。

(10) {泣いて／泣きながら} 戻ってきた¹²。

(11) いすに {座って／?座りながら} 聞いている。

成田(1983)、三宅(1995)の指摘のように、「-ながら」に置換可能な「て」形の動詞は、動作の持続を含意し、置換不可能な「て」形の動詞は結果状態の持続を含意するものである。

以上見たように、先行研究の記述で付帯状況を表す動詞「て」形の特徴を説明できる¹³。ここで特に注目したいのは「-ながら」との

¹¹ 吉永(2008)の説明のように、付帯状況を表す動詞「て」形のうち、従属度がやや低く他の要素(「-ながら」または「-たまま」)に置換可能なものと、述語動詞と完全に一体化して他の要素に置換不可能なものがある(吉永 2008 : 9 の例をミニマルペアの形式で次に示す)。

(i) {歩いて／*歩きながら} 帰る。

(ii) {笑って／笑いながら} 頷く。

(i)のような動詞「て」形は所謂「方法・手段」を表す「て」形で、(ii)の「て」形と区別できるが、本稿では成田(1983)、加藤(1995)、吉永(2008)などと同様に両者を区別しないことにする。

¹² 本稿の例文で出典を示さないものは作例である。以下同様。

¹³ なお先行研究では、付帯状況を表す動詞「て」形と、継起、原因・理由、並列などの「て」形の用法との関係について異なる見解を示している。内丸(2006)では付帯状況を表す動詞「て」形と、他の「て」形の用法とは異なる統語構造に対応しており、二分できると主張している。一方、仁田(1995)、吉田(2012)などでは付帯状況を表す動詞「て」形とほかの「て」形は連続的なものと捉えている。本稿は、この点については十分に議論する準備ができていないが、内

共起制限を考察することにより、直前の動詞の意味的特徴を記述できることである。詳しくは3節で述べるが、本稿ではこの概念を利用して感情動詞の語彙的意味を考察する。

次に、先行研究では、本稿の考察対象となる付帯的な心的状態を表す動詞「て」形は、付帯状況を表す動詞「て」の下位分類の一つとして取り上げられている(仁田 1995、吉永 1997、2008、吉田 2012 など)。先行研究の記述は次のようにまとめられる。

(12) 心的状態を表す動詞「て」形

- a. 感情動詞によって形成されるもの(仁田 1995、吉永 1997、2008、吉田 2012)¹⁴。
- b. 主たる動作が実現する時の主体の心的なあり方を表す(仁田 1995、吉永 1997、2008、吉田 2012)。
- c. 動詞「て」形と主節の主語は同じであるが、その意味役割は異なる。前者は経験者(experiencer)、後者は動作主(agent)が選択される(吉永 2008)。
- d. 「-ながら」に基本的に転換可能である(仁田 1995、吉田 2012)。
- e. この類の動詞「て」形の中には、すでに副詞と見てもいいものがあり、辞書によっては副詞として見出し項目に立てるものもある(成田 1983)。

(12a)～(12e)の記述は次のような例から確認できる。例えば(13)(14)では、感情動詞「悲しむ」「懐かしむ」のテ形は主たる動作「言う」「話す」が行われている時の主体の心的状態を表している。

(13) この言葉を聞いてヌーレディンは非常に悲しんで言いました

丸(2006)で用いられる統語テスト(「しかーない」テスト、「さえ」焦点化テスト、擬似分裂文テスト)は、すべての付帯状況を表す動詞「て」形に適用できるかどうかという問題があると考えられる。筆者は実際にそれを利用して付帯的な心的状態を表す動詞「て」形の統語構造を分析してみたが、適格かどうかは無理に判断しなければならない場合が多かった。また吉田(2012)の指摘のように、テストに用いられている例文が限られているという問題もある。内丸(2006)の説を再検討する必要があると思われる。

¹⁴ 但し、仁田(1995)では「内的な心理作用を表す動詞」、吉永(2008)では「感情的心理動詞」という用語は用いられている。

た。(「BCCWWJ」)

- (14) 上野さんは「ついこの前の話ですよ」と懐かしんで話してくださいました。(木原安姝子 2001『里の石橋』p. 46)

またこの2例からも分かるように、「て」形の動詞の主語と、述語動詞の主語は同様であるが、その意味役割は異なる。前者は感情の経験者で、後者は動作の動作主と解釈される。

そして、辞書で確認したところ、成田(1983)の指摘のように、「このんで」「急いで」などは見出し語として辞書に登録されている(「このんで」は小学館の『大辞泉』、三省堂の『大辞林』、「急いで」は三省堂の『必携類語実用辞典』に登録されている)。付帯的な心的状態を表す動詞「て」形のうち副詞化が進んでいるものがあると言える。

更に、仁田(1995)の説明のように、次のような例では感情動詞の「て」形は「-ながら」に置換可能である。

- (15) 子供が帰るのを {心配して／心配しながら} 待っている。

- (16) 人って {悩んで／悩みながら} 生きるものだ。

(13)～(16)から、(12a)～(12e)の先行研究の記述は妥当であると言える。しかし、先行研究には次のような問題がある。

まず、前述のように感情動詞に「て」形が後接する形式と、「-ながら」が後接する形式は意味・用法の違いがあるが、先行研究ではその違いについては説明されていない。

- (17) 「ええ、{喜んで／?喜びながら} お供します。わたくしが車椅子を押してあげましょう」(BCCWJ)

- (18) {安心して／?安心しながら} 任せてください。

また、共起頻度を見ると、「て」形や「-ながら」ほど高くないが、感情動詞に「-たまま」が後接し付帯的な心的状態を表す場合もある¹⁵。「-たまま」と比較することにより、類似した意味・用法を持つ付帯状況を表す感情動詞「て」形の特徴を記述できると思われる。

- (19) そして失望したまま、東京のアパートに帰ってきた。

¹⁵ 共起頻度について詳しくは5節で述べる。

(「BCCWJ」)

(20) 相談する相手によっては感受性が薄いんだろうとか言われることばかりで余計に一人で悩んだまま成人してしまいました。(「BCCWJ」)

(21) しばらくの間、戸惑ったままアンヌを見つめていた。(「BCCWJ」)

更に、吉田(2012)では、感情動詞の「て」形は「-ながら」に置き換えられない場合があることを指摘し、その原因は、直前の感情動詞の意味によると説明している。例えば、次の例で感情動詞の「て」形が「-ながら」に置き換えられないのは「落ち着く」は達成動詞のためであると説明している。つまり、「-ながら」は基本的に持続性を持つ非限界動詞を要求するもののため、達成動詞「落ち着く」と共起できないということである¹⁶。

(22) どうぞ、{落ち着いて／*落ち着きながら}話してください。
(吉田 2012 の例(2-65))

感情動詞の時間的性質について議論が続いている¹⁷が、吉田(2012)の記述は付帯状況を表す形式との共起から感情動詞の語彙的意味を考察できることを示唆しており、興味深いものである。前述のように本稿ではこの概念を利用して感情動詞の語彙的意味を考察する。

しかし、「BCCWJ」では確認できないが、次のように「-ながら」は「落ち着く」に後接し付帯的な心的状態を表す場合がある。

(23) なるべく落ち着きながら書くつもりだった。(中井宏美 2011『あなたの子供を辞めました』 p.231)

(24) ざわめく生徒たちと比べ、一人落ち着きながら、折原は何か納得した顔で次へと進める。(岸美羽 2001『SIGNAL・RED』 p.59)

¹⁶ 付帯状況を表す「-ながら」の直前の動詞の特徴については、三宅(1995)、村木(2006)、日本語記述文法研究会(2008)などを参照のこと。

¹⁷ 詳しくは 2.2 節で述べる。

(25) そう落ち着きながら言い終えた後、それまで垣間見せることもなかった感傷的な目で空を見つめ、煙草の煙をゆっくり吐き出した。(西澤壯二郎 2003『ブルーパッション』p. 46)

(23)～(25)から動詞「落ち着く」の持つ時間的性質を再検討する必要があると言える。また(22)では「落ち着きながら」が用いられない理由も考える必要があると思われる。以上、付帯状況を表す動詞「て」形、特に感情動詞「て」形についての先行研究をまとめた。

2.2 感情動詞の時間的性質について

日本語の感情動詞に関する先行研究は多い。例えば、宮島(1972)、寺村(1973、1982)、国立国語研究所(1985)、町田(1989)、堀川(1992)、工藤(1995)、長野(1995)、馬場(2001、2002)、坂東・松村(2001)、三原(2000、2004)、吉永(1997、1998、2008)などでは、感情動詞の統語的・意味的特徴を記述している。また神尾(1990)、金水(1991、2000)、山岡(1998)、三枝(2011)などでは、感情動詞文の意味特徴や機能を考察している。これらの研究の蓄積により、感情動詞の特徴一格成分、他動性、意志性、人称性などが明らかになってきている。

ここで注目したいのは、感情動詞の時間的性質である。感情動詞の時間的性質については研究者の意見が分かれている。例えば、「むかつく、いらいらする」などの感情動詞は「る」形で「現在」の事態を表すものなので、「る」形で「未来」の事態を表す動的動詞と対立し、状態動詞に分類すべきと主張している先行研究(原沢 2010 など¹⁸)があるが、工藤(1995)では感情動詞を状態動詞と動き動詞の中間的なものとして位置づけながら、アスペクト対立(つまり「る」形と「ている」形)を持っていることから、動き動詞として扱うことも可能であると述べている。本稿では、アスペクト対立を持つ感情動詞はアスペクト対立を持たない状態動詞と区別し、動き動詞で

¹⁸ 馬場(2001)でも怒りを表す感情動詞のうち、状態動詞と連続性のあるものが存在することを指摘している。

あると考える。この立場は山岡(1998)、三原(2000、2004)、吉永(1997、1998、2008)などと同様である。

問題は、感情動詞は持続性や限界性を持つものかどうかということである。例えば、山岡(2000)では、感情動詞のうち、「あきれる、驚く、ほっとする」などは「情意変化動詞」と呼び、瞬間動詞の一種であると説明している。また、吉田(2012)では、「落ち着く」のような感情動詞は Vendler(1967)の達成動詞(持続性と限界性を持つもの)であると指摘している。一方、三原(2000、2004)、吉永(2008)では、日本語の感情動詞は Vendler(1967)の活動動詞(継続性を持ち、限界性を持たないもの)に分類すべきと主張している。感情動詞の語彙的意味を明らかにするために、その持続性と限界性に焦点を当て検討する必要があると言える。

前述のように、付帯状況を表す形式「て」形、「-ながら」、「-たまま」との共起を考察することにより、直前の動詞の意味を記述することが可能である。5節ではこの概念を利用して感情動詞の語彙的意味を分析する。以上、先行研究の成果と問題点をまとめた。

3. 分析方法

3.1 考察範囲

本節では、本稿の用語と考察範囲を述べる。

本稿の考察対象となる「感情動詞」は学者により用語が異なるだけでなく、その定義や判断の基準を明示した先行研究は筆者の知る限り吉永(1997、2008)のみである。本稿では、吉永に倣って、生物(主に人間)の喜怒哀楽、好き嫌い、高揚・落胆のような精神状態・心理作用を表す動詞を「感情動詞」と呼び、身体の知覚・感覚(「痛む、渴く」など)や、思考・信念を表す動詞(「思う、考える、信じるなど」と区別する。感情動詞と呼ぶのは、同じく精神状態、心理作用を表す感情表現—感情形容詞(「懐かしい、嬉しい、悲しい」など)と対比して捉えるためである。また本稿では、吉永(1997、2008)に従い、感情動詞を次のように規定する。

(26) 感情動詞の特徴

- a. 表情態度など顕著な外見的兆候を表さないこと。
- b. 伝達活動や目的遂行活動を表さないこと。

吉永(1997、2008)の説明のように、(26a)(26b)のように規定することにより、感情を伴いながら主として、外的動作を表す動詞(「泣く、笑う」など)や目的遂行を果たすための動作を表す動詞(「からかう、頑張る」など)と、感情動詞とを区別できる。

本稿でいう「感情動詞」は、山岡(2000)では「感情動詞」のうちの「情意」を表すもの、三原(2000)では「ES(experiencer-subject)型心理動詞」、坂東・松村(2001)では「心理動詞(psychological verb)」、吉永(2008)では「感情的心理動詞」と呼ばれている。用語が異なるが、各研究で扱っている動詞を見る限りでは、本稿で考える「感情動詞」と重なる部分が多い。そこで、本稿では感情動詞「て」形を含む用例を収集する際に先行研究(工藤1995、長野1995、山岡2000、三原2000、坂東・松村2001、吉永2008)で挙げられている感情動詞のリストを参考にした¹⁹。しかし、次のようなものは考察対象から除外する。

(27) 考察対象外のもの

- a. 頭に来る、腹が立つ、血が騒ぐ、鳥肌が立つ、など。
- b. ほっとする、かっとする、ぞっとする、など。
- c. 欲しがる、寂しがる、懐かしくなる、など。

(27)のような動詞句、「オノマトペ+する」「形容詞語幹+がる」はいずれも感情を表す表現で、かつ(26)の基準を満たしているものなので、感情動詞(句)として扱うこともできるが、本稿ではそれら

¹⁹ 考察対象の決定について、本稿のように先行研究のリストを参照することにより、典型的な感情動詞、及び感情動詞の範囲をある程度把握できると思われる。しかしこのような方法を利用する場合、上記の定義に該当するが考察に漏れるものがあることを認めざるを得ない。また本来ならば本稿で考察した感情動詞のリストを提示すべきであるが、紙幅の関係で割愛する。なお先行研究のうち、工藤(1995)では「反省する」、長野(1995)では「青ざめる、赤面する、笑う、震え上がる」、山岡(2000)では「信じる、信用する、分かる、評価する、悟る」なども感情動詞として扱っているが、本稿では「反省する、信じる、分かる、評価する、悟る」などは思考動詞、「笑う、青ざめる、赤面する」は(26a)(26b)の基準を満たさないため、考察対象外となる。

を記述する準備がまだできていないため、考察対象から除外する。

3.2 分析視点

前述のように本稿の目的は二つある。一つは「-ながら」「-たまま」を比較し、付帯状況を表す感情動詞「て」形の特徴を記述することである。もう一つは、付帯状況を表す形式との共起から、感情動詞の語彙的意味を記述することである。この二つの目的を果たすために、本稿では、まず付帯状況を表す各形式を比較する際に、1) 被修飾成分となる述語の特徴、2) 直前の動詞の特徴、3) 各形式と述語の表す事態間の意味関係を考察する。付帯状況を表す各形式は異なる意味を持っているので、それにより修飾される述語や、直前に来る動詞も異なると思われる。また、修飾成分の各形式と、被修飾成分である述語との意味関係に注目することにより付帯的な心的状態を表す動詞「て」形の特徴を明らかにすることができると思われる。

次に、感情動詞の語彙的意味を記述する際に、付帯状況を表す形式との共起制限を考察する。「て」形、「-ながら」、「-たまま」と共起するかどうか、また共起する場合、付帯状況の意味を表すかどうかを分析することにより、感情動詞の語彙的意味を記述できると思われる。以下、分析の結果を述べる。

4. 付帯状況を表す感情動詞「て」形の特徴

本節では、付帯状況を表す感情動詞「て」形は次の三つの特徴があることを示す。

(28) 付帯状況を表す感情動詞「て」形の特徴

特徴一：この形式は制御可能性のある動作を行っている時の主体の心的状態を表すものである。

特徴二：主体がどのような心理状態の中で自然に（必然的に予期通りに）述語の表す動作を行うかを表す。

特徴三：＜快＞の心的状態を表す感情動詞「て」形の場合、述語動詞の表す行為は主体の本意（主体の意に沿うもの）によるものであるという意味が派生する。

4.1 特徴一

付帯状況を表す感情動詞「て」形は、制御可能性のある動作を行っている時の主体の心的状態を表すものである。

まず、被修飾成分である述語動詞に注目すると、付帯状況を表す感情動詞「て」形の特徴の一つとして、述語に意志性を持つ動詞が来ることが挙げられる。例えば、(29)～(31)では感情動詞「て」形は意志動詞を修飾し、主体の付帯的な心的状態を表している。

(29) 俺は焦って止めようとしたが、彼は聞こうとはしない。
(「BCCWJ」)

(30) (略)いくらか照れて言った。(「BCCWJ」)

(31) 彼女は怯えて、かぼそい声で、「ワイントローブさんよ」と、
答えた。(「BCCWJ」)

前述のように先行研究では、付帯状況を表す動詞「て」形は述語に意志動詞が用いられると説明しているが、(29)～(31)から、付帯状況を表す感情動詞「て」形の場合も、述語動詞は意志性を持つものであることが分かる。

注意したいのは次の3点である。まず、述語動詞は意志性を持つものであることは付帯状況を表す動詞「て」形の特徴であり、付帯状況を表す形式に共通するものではないことである。

例えば(32)(33)では「-ながら」は付帯的な心的状態を表しているが、(29)～(31)と異なり、述語に無意志動詞や名詞が来ている²⁰。

(32) {焦りながら／？焦って}、私の胸にひとつの不安が萌した。
(「BCCWJ」)

(33) {照れながら／？照れて}、どこか誇らし気な笑顔だった。
(「BCCWJ」)²¹

²⁰ ちなみに付帯的な心的状態を表す「-たまま」の場合は「て」形と同様に、述語に意志性を持つ動詞が来る。

(i) 僕は困惑したまま、鳥井を見つめる。(「BCCWJ」)

(ii) そして失望したまま東京のアパートに帰ってきた。(「BCCWJ」)

²¹ (33)では「-ながら」は付帯状況を表していると解釈できるが、逆接の意味を表しているとも解釈できる。逆接の意味と解釈できることは「ながらも」に言い換えられることから分かる。村木(2006)でも「-ながら」は「同時」の意味(本稿でいう付帯状況を表す意味に当たる)と、「逆接」の意味が同時に成立する場合があると指摘している。

(32) (33)から分かるように、付帯状況を表す感情動詞「て」形は無意志動詞や名詞を修飾できない。付帯状況を表す感情動詞「て」形が用いられる場合、述語動詞は意志性を持つものと言える²²。

次に、感情動詞の中に意志性の高いものと低いものがある²³が、意志性の低い感情動詞「て」形が用いられる場合は、その被修飾成分である述語動詞の意志性が低くなることに注意したい。

例えば、「安心する」「喜ぶ」は命令表現、意志表現とも共起できるので意志性が高いもの²⁴と思われるが、「退屈する」「焦れる」は命令表現、意志表現と共起できないことから、意志性が低いと言える (cf. 「安心 {する / してください / しよう}」「退屈 {する / ? してください / ? しよう}」)。次のように、「退屈して、焦れて」により修飾されている述語動詞は「てください」と共起しにくくなる。

(34) 年末年始を安心して {過ごした / 過ごそう}。

(35) 喜んで {引き受けた / 引き受けてください}。

(36) 年末年始を退屈して {過ごした / ? 過ごそう}。

(37) 少々焦れて {言った / ? 言ってください}。

更に、付帯状態を表す感情動詞「て」形が用いられる場合、被修飾成分である述語動詞は意志性を持つものであるが、その動詞の表す動作は主体の意図によるものでない場合がある。これは、次の例で「思わず」が用いられていることから窺える。

(38) (略)博紀は思わず安心して笑ってしまった。

(長坂敏正 2005 『真夏の少年たち』 p. 189)

意志動詞でありながら「思わず」と共起していることから、述語動詞の表す動作は実際に主体の意志によって行われたものではない

²² 次のように感情動詞「て」形の後ろに無意志動詞や形容詞が来る場合もある。

(i) 緊張して固まってしまった。

(ii) 緊張して不安だ。

しかし、(i)(ii)の「て」形は付帯状況を表しているのではない。(i)は原因・理由を表す「て」形で、(ii)は並列を表す「て」形である。

²³ 感情動詞に意志性の強弱が存在することについては高(2012)を参照。また、動詞の意志性については仁田(1988)、森山(1988)などを参照。

²⁴ ここでいう「意志性が高い」というのは意志性の低い感情動詞と比べて相対的に高いという意味で、動詞の中で最も意志性の高いものという意味ではない。

が、主体の意志により制御可能なものと言える。従って、付帯状態を表す感情動詞「て」形が用いられる時、その述語動詞の表す事態は制御可能性のあるものと言える²⁵。

以上付帯状況を表す感情動詞「て」形の修飾する述語を考察した。意志性の低い感情動詞「て」形の場合は被修飾成分である述語動詞の持つ意志性が低くなるという特徴があるが、この特徴を除いて他の付帯状況を表す動詞「て」形の特徴と共通していると言える。

4.2 特徴二

次に、付帯状況を表す感情動詞「て」形は、主体がどのような心理状態の中で自然に（必然的に予期通りに）動作を行うかを表すものであることを見る。

動詞「て」形と述語の表す事態との意味関係に注目すると、動詞「て」形は逆接の意味を持つ文脈で用いられないのが特徴である。一方、周知のように「-ながら」は逆接の意味を表す用法がある。また付帯状況を表す「-たまま」も逆接の意味を持つ文脈で用いられる。

例えば、(39)～(41)の例では「-ながら」「-たまま」は付帯状況を表しているが、2形式の直後に「しかし、のに」が用いられていることから、「-ながら」「-たまま」と述語の表す事態は逆接の関係にあると言える²⁶。次のように付帯状況を表す感情動詞「て」形はこのような場合に用いられない。

(39) 半ば {怯えながら / ? 怯えて}、しかしそれ以上の快感と好奇心とのまじった気持で、祭壇の前に棒立ちになっている
ミラン神父を私は見た。(遠藤周作 1976『巡礼:アデンまで』 p. 332)

(40) {感謝しながら / ? 感謝して}、しかしそれをお受けする気持はなかった。(BCCWJ)

²⁵ 文の表す事態の自己制御性について詳しくは仁田(1988、2004)を参照。

²⁶ 森田(1989)でも「-たままなのに」が用いられる場合、逆接意識が強まると指摘している。

(41) {怒ったまま／？怒って}、しかし律儀に立ち止まった二階堂は振り返る。(http://blogs.yahoo.co.jp/manmanmarlu/archive/2012/12/27、2013.2.10)

(42) {戸惑ったままな／？戸惑って} のにお母さんの前ではいつもと変わらないジブンがいた。

(http://yaplog.jp/cloudrop/archive/28、2013.2.28)

ちなみに(43)～(46)では、(40)～(43)と同様の感情動詞を用いているが、付帯状況を表す感情動詞「て」形は用いられる。

(43) その一部始終を、水彩は半ば怯えて見ていた。「BCCWJ」

(44) しかしすべて必要なものなのだと、感謝して謙虚に受け入れることが大切です。「BCCWJ」

(45) 泣くというより怒って叫んでいるんです。「BCCWJ」

(46) テレサの方は戸惑ってラウルを見つめた。「BCCWJ」

逆接の意味を持つ文で付帯状況を表す感情動詞「て」形が用いられないことは、述語動詞の表す動作の生起は感情動詞「て」形の表す心的状態から予想できることを意味すると考えられる。つまり、副詞的成分の表す心的状態において、主体が述語動詞の表す動作を行うのは自然的、必然的なことであると話し手（書き手）は捉えている、ということである。付帯状況を表す感情動詞「て」形は、主体がどのような心理状態の中で必然的に予期通りに動作を行うかを表す時に用いられるものと言える。言うまでもなく、このような意味的特徴を持っているのは、構成要素の「て」形は「順接」を表すもののためである。またこの場合の「て」形は「継起」の意味を内包し、つまり感情動詞「て」形の表す心的状態が動作の発生する前に先に生起・存在するものと言える。

以上の記述を用いて(47)～(49)のような例を説明できる。「悲しんで」「困って」「悲しみながら」「困ったまま」は同様に付帯的な心的状態を表すことができるが、(47)では「て」形は用いられるが、(48)では「て」形より「-ながら」「-たまま」を用いるほうが自然である。

(47) {悲しんで／困って} 泣いていた。

(48) { ? 悲しんで / 悲しみながら } 笑っていた²⁷。

(49) { ? 困って / 困ったまま } 笑った。

人が悲しんでいる時、困っている時に「笑う」より「泣く」動作を行うほうが自然である。前述のように、感情動詞「て」形は「-ながら」「-たまま」と異なり、主体がどのような心理状態の中で自然に（必然的に予期通りに）動作を行うかを表すものである。そのために、「泣く」時の心的状態を表している(47)では「悲しんで」「困って」は用いられるが、「笑う」時の心的状態を表している(48)(49)では感情動詞「て」形を用いると不自然になる。

4.3 特徴三

本節では、＜快＞の心的状態を表す感情動詞「て」形の場合、述語動詞の表す行為は主体の本意（主体の意に沿うもの）によるものであるという意味が派生することを見る。

ここで注目したいのは、直前の感情動詞の意味である。次のように＜快＞の心的状態を表す感情動詞「て」形は話者の意志や態度を表明する場合に用いられる。

(50) 「競合店よりも高い商品がありましたら、喜んで値下げさせていただきます」（水元均 2010『スーパーマーケットのバリューイノベーション』p.187）

(51) 「それはもちろん、喜んでご案内しますよ。(略)」（内田康夫 1993『追分殺人事件』p.92）

(52) (略)すぐ訂正していただければと思いますので、安心して話させていただきます。（食料・農業政策研究センター1991『東アジア農業の構造問題』p.195）

(53) ありがとうございます。これで落ち着いて食べれます。

次のように、＜不快＞を表す感情動詞「て」は話者の意志や態度を表明する場合に用いられない。

(54) ? 困って値下げさせていただきます。

²⁷ この例における「-ながら」は付帯状況を表す意味も、逆接を表す意味も解釈可能である。注21を参照のこと。

(55) ? 緊張してご案内しますよ。

(56) ? 苦しんで話させていただきます。

(57) ? これで心配して寝ます。

(50)～(53)と(54)～(57)との比較から、付帯状況を表す感情動詞「て」形の用法は、構成要素の感情動詞の持つ〈快〉〈不快〉の意味により異なると言える。

結論から言えば、〈快〉を表す感情動詞「て」形の場合、被修飾成分である述語動詞の表す行為は主体の本意(主体の意に沿うもの)によるものであることを含意する。またこの形式がこのような意味を持っているのは、〈快〉を表す感情動詞の特徴と、付帯状況を表す「て」形の特徴を併せ持っているためである。

まず、〈快〉を表す感情動詞は基本的に〈不快〉を表す感情動詞より意志性が高い。これは〈不快〉を表す感情動詞「て」形と異なり、〈快〉を表す感情動詞「て」形が話者の命令、意志を表す文や、目的を表す「ため(に)」節内に用いやすいことから窺える²⁸。

(58) 楽しんで作ってください。(「BCCWJ」)

(59) 取引先に満足して帰っていただきよう。(「BCCWJ」)

(60) 子どもを安心して育てるためにはさまざまな保育制度が必要で、(略)。(林邦雄 2006『保育用語辞典』p.326)

(61) ? 困って作ってください。

(62) ? 取引先に失望して帰っていただきよう。

(63) ? 子どもを悩んで育てるためにはさまざまな保育制度が必要で、(略)。

また 2.1 節で述べたように、動詞「て」形は、「動作持続」または「結果持続」の「持続」の意味を持っているが、〈快〉を表す感情動詞のような意志性の高い動詞の場合、その「て」形の表す「持続」

²⁸ 〈不快〉を表す感情動詞が、話者の命令、意志を表す文や、目的を表す「ため(に)」節内に用いにくいのは、語用論的理由によると思われる。感情動詞についての説明ではないが、森山(1988)でも意志性の問題は語用論的な問題であると説明している(但し、森山 1988 では本稿でいう「意志性」を「主体性」と呼んでいる)。

は、主体的に行われるものと考えられる。つまり、当の心的状態の生起、持続に対して主体が関与していると言える。

(58)～(60)を例に説明すると、この3例において話者が望んでいるのは、ある心的状態における動作の実現である。つまり、この場合、述語動詞の表す動作（「作る」「帰る」「育てる」）の実現も、感情動詞「て」形の表す心的状態（「楽しむ」「満足する」「安心する」）の生起、持続も、主体の関与できるものとして見なされている、ということである。ここから、意志性の高い、＜快＞を表す感情動詞「て」形が用いられる場合、この形式の表す心的状態の持続は主体が関与していることが分かる。

更に4.1、4.2節で述べたように、付帯状況を表す感情動詞「て」が用いられる場合、被修飾成分となる述語の表す制御可能な動作は感情動詞「て」形の表す心的状態の中で自然に（必然的に予想通りに）行われるものである。前述のように、＜快＞を表す感情動詞「て」が用いられる場合、当の心的状態の存在は主体が関与しているのである。主体がどのような感情を持ってどのような動作をするかはすべて主体自身が関与し、かつその動作の発生は話者から見て自然的、必然的なことであると捉えられるのは当の行為が主体の本意によるもののためであると推測される。従って、＜快＞を表す感情動詞「て」形が用いられる場合、述語動詞の表す行為は主体の本意によるものであるという意味が派生すると言える。

このように＜快＞を表す感情動詞「て」形の特徴を捉えることにより、付帯的な心的状態を表す「-ながら」との違いを説明できる。(64)～(66)のように付帯的な心的状態を表す「-ながら」も聞き手への働きかけを表す文や、目的を表す「ため(に)」節内に用いられる²⁹。このような場合「-ながら」の表す心的状態の存在（生起、持続）も、述語動詞の表す事態の実現も主体の関与できるものと言える。

²⁹ ちなみに感情動詞に後接する「-たまま」は、話者の命令、意志を表す文や、目的を表す節内には用いられない。

(i) 怒ったまま家を {出た / ? 出てください / ? 出よう}。

(ii) ? 怒ったまま帰ってもらうために何をやればいいか。

(64) (略)余計な疑いは捨て、大いに感謝しながら受け取りましょう。(飯田史彦 2012『生きがいの創造』p. 659)

(65) それらひとつひとつのイメージを、頭の中で自分だけの映画を観るような気持ちで、楽しみながら思い描いてください。(佐藤富雄 2003『あなたの夢をかなえる「未来日記」』p. 47)

(66) 楽しみながら環境への理解と関心を深めてもらうために開催した今回のフェアには、十六団体が参加。(「BCCWJ」)

しかし<快>を表す感情動詞「て」形と異なり、付帯的な心的状態を表す「-ながら」で話者の意志、態度を表明することができない。

(67) ありがとうございます。心から{感謝して／?感謝しながら}受け取らせていただきます。

(68) {喜んで／?喜びながら}手伝わせていただきます。

(69) これで{安心して／?安心しながら}帰れるでしょう。

(67)～(69)で付帯的な心的状態を表す「-ながら」が用いられない理由は次のように考えられる。即ち、前述のように「-ながら」が用いられる時、被修飾成分となる述語の表す事態との間に「逆接」の関係が成立する場合がある。従って、述語動詞の表す行為は副詞的成分の表す心的状態の中で自然に必然的に行われるものではなく、主体の意に反するものである可能性があるとして解釈できる。付帯的な心的状態を表す「-ながら」で話者の意志、態度を表明できない理由はここにあると言える。一方、前述のように<快>を表す感情動詞「て」形が用いられる場合、述語動詞の表す行為は主体の本意によるものであることを含意する。そのためにこの形式で話者の意志、態度を表明できると言える。以上、<快>を表す感情動詞「て」形を含む副詞的成分の特徴を見た。

4.4 まとめ

これまでの考察では、付帯状況を表す感情動詞「て」形は次の三つの特徴があることが明らかになった。本節の最後に、以上の記述で付帯状況を表す感情動詞「て」形と、類似した意味・用法を持つ

「-ながら」「-たまま」との違いを説明できることを示す。

まず、付帯状況を表す感情動詞「て」形と「-たまま」との違いを見る。(71)(72)のように「戸惑って」「戸惑ったまま」は同様に付帯的な心的状態を表す表現であるが、(72)では「戸惑って」は用いられない。

(71) {戸惑って／戸惑ったまま} 立っていた。

(72) {戸惑ったまま／？戸惑って} 頷いた。

前述のように、付帯状況を表す感情動詞「て」形は「-たまま」と異なり、主体がどのような心理状態の中で自然に（必然的に予期通りに）述語の表す動作を行うかを表すのが特徴である。人が戸惑っている時、頷くのは自然で必然的なこととは思われない。そのために(72)では「戸惑って」を用いると不自然になる。一方、付帯状況を表す「-たまま」は、通常は起こらない、或いは相応しくない、好ましくない状況を含意する（森田 1989、三宅 1995 など）。(72)では、「-たまま」を用いることにより、戸惑っている主体が予想に反する動作を行ったことを表していると言える。

また(71)で「戸惑って」と「戸惑ったまま」とも用いられるのは、二通りの解釈とも可能であるからと思われる。即ち、「戸惑って」が用いられる場合は、戸惑っている主体が自然に立ち止まっていることを表していると解釈されるが、「戸惑ったまま」が用いられる場合は、好ましくない、相応しくない状況として、戸惑っている主体が呆然と立っていることを表していると解釈されるのである。

次に、付帯状況を表す感情動詞「て」形と「-ながら」との違いを見る。「心配して／安心して」「心配しながら／安心しながら」は同様に付帯的な心的状態を表す表現であるが、(73)では「安心しながら」を用いると不自然になる。

(73) これで {安心して／？安心しながら} 任せます。

(74) 検査結果を {心配して／心配しながら} 待っている。

前述のように、＜快＞を表す感情動詞「て」形は、被修飾成分となる述語の表す行為は主体の本意によるものであることを含意し、

話者の意志、態度を表明する場合に用いられる。(73)では「安心して」を用いて「仕事を任せる」ことに対して「自分が安心している」という話者の態度を表していると言える。一方、「-ながら」は逆接（予期に反すること）を表す場合があるので、被修飾成分となる述語動詞の表す行為は主体の意に沿うものであるという意味が派生しない。そのために(73)のような話者の態度を表明する例では用いられないと言える。

また(74)で「心配して」「心配しながら」とも用いられるのは二通りの解釈ができるためであると思われる。「-ながら」は主な動作を行う際の様子などを描写する副次的な動作を表すものである（グループ・ジャマシイ 1998）。「心配しながら」を用いる場合は、主体が待っている時に同時に存在する副次的な状態（心的状態）を表していると解釈されるが、「心配して」を用いる場合は、検査の結果を心配している主体が必然なこととして結果が出るのを待っていることを表していると解釈される。

最後に次のような例で感情動詞の「て」形を「-ながら」に置き換えられない理由を考える。(75)に対して吉田(2012)では「落ち着く」は達成動詞のため、「-ながら」と共起しにくいと説明している。

(75) どうぞ、{落ち着いて／*落ち着きながら}話してください。
((22)を再掲)

しかし、(76)のように「落ち着く」は「-ながら」と共起する場合がある。(75)で感情動詞の「て」形を「-ながら」に置き換えられないのは、直前の動詞の語彙的意味のためではないと考えられる。

(76) ざわめく生徒たちと比べ、一人落ち着きながら、折原は何か納得した顔で次へと進める。((24)を再掲)

(75)で感情動詞の「て」形を「-ながら」に置き換えられない理由について筆者は次のように考える。(75)では話者が望んでいるのは、「落ち着いている」という心的状態において「話す」ことを実現することである。しかし、前述のように「-ながら」は主たる動詞に付随している、非必然的な付帯状況を表すものである。(75)では「落

ち着きながら」を用いると、「話す」ことを実現すると同時に「落ち着く」という非必然的な心的状態も実現してほしいことを表していると解釈可能なため、不自然な文になる。一方、(76)では「落ち着きながら」を用いることにより、主体が納得した顔で次へ進んでいると同時に、非必然ではあるが、その気持ちが落ち着いていることを表していると言える。従って、(75)で「-ながら」を用いて付帯的な心的状態を表すことができないのは、「-ながら」の持つ意味によって制限されているためであると考えられる。以上、付帯状況を表す感情動詞「て」形と「-ながら」「-たまま」との相違を見た。「-ながら」「-たまま」と異なり、付帯状況を表す「て」形の特徴を捉えるために直前の動詞の特徴だけでなく、被修飾成分との意味関係も考慮する必要がある、より複雑なものと言える。

5. 感情動詞の語彙的意味—時間的性質

本節では、付帯状況を表す「て」形、「-ながら」、「-たまま」との共起を考察し、感情動詞の時間的性質を分析する。以下、一部を除いて感情動詞の殆どは活動動詞（持続性を持ち、限界性を持たないもの）であることを示す。

ここでまず Vendler (1967) の動詞分類を利用して各種の動詞の「て」形の意味を確認しておく。注目したいのは、「て」形で付帯状況を表すことが可能なのは、活動動詞と一部の到達動詞（具体的には再帰動詞と主体変化動詞）であるということである。

(77) Vendler の 4 種類の動詞とその「て」形の意味

【A】活動動詞—「て」形で付帯状況を表すことができる。

例 笑って答えた。＜付帯状況を表す＞

例 CD を 聞いて英語を勉強する。＜付帯状況を表す＞

【B】到達動詞—到達動詞の一部は「て」形で付帯状況を表すことができる。

例 扉を 開けて挨拶した。＜継起を表す＞

例 扉を 閉めてため息をついた。＜継起を表す＞

例 座って話す。＜付帯状況を表す＞

例 帽子を被って歌う。〈付帯状況を表す〉

【C】達成動詞—「て」形で付帯状況を表すことができない。

例 ケーキを作って食べた。〈継起を表す〉

例 家を建ててプレゼントした。〈継起を表す〉

【D】状態動詞—「て」形で付帯状況を表すことができない。

例 英語ができて仕事もできる。〈並列を表す〉

例 君がいてよかった。〈原因・理由を表す〉

また、次のように4種類の動詞はともに「-ながら」で付帯状況を表すことができる。

(78) Vendlerの4種類の動詞と付帯状況を表す「-ながら」

【A】活動動詞—「-ながら」で付帯状況を表すことができる。

例 笑いながら答えた。

例 音楽を聞きながら英語を勉強する。

【B】到達動詞—「-ながら」で付帯状況を表すことができる。

例 座りながら歌う。

例 帽子を被りながら歌う。

【C】達成動詞—「-ながら」で付帯状況を表すことができる。

例 料理を作りながら話をする。

例 家を建てながら農業を営む。

【D】状態動詞—「-ながら」で付帯状況を表すことができる³⁰。

例 家にいながら買い物ができる。

例 日本にいながら英語を身に付ける。

(77)(78)からVendlerの動詞分類のうち、「て」形と「-ながら」の両形式で付帯状況を表すことが可能なのは、活動動詞と一部の到達動詞であることが分かる。前述のように、感情動詞は「て」形と「-ながら」のついた形で付帯状況を表すことができる。従って、感情動詞は活動動詞または到達動詞と考えられる。

注意すべきは、「-たまま」も付帯状況を表す形式であるが、感情

³⁰ この場合、逆接を表しているとも解釈できる。状態動詞に後接する「-ながら」については、佐藤(1997)、村木(2006)などを参照。

動詞に「-たまま」が後接する形で付帯的な心的状態を表す例は非常に少ないことである。『現代書き言葉均衡コーパス（「BCCWJ」）』を調べたところ、副詞的成分としての「感情動詞＋たまま」は僅か7件である（「戸惑ったまま」は3件、「失望したまま」は1件、「怒ったまま」は2件、「困惑したまま」1件である）。感情動詞と「-たまま」は相性が悪いと言える。

三宅(1995)によれば、「-たまま」は直前の動詞が「維持」あるいは「結果持続」を持つ事態を表すものの場合、付帯状況として成立する³¹。到達動詞は「維持」あるいは「結果持続」の局面があるが、活動動詞は「過程」の局面しかない。「-たまま」と相性が悪いことから、極一部を除き、感情動詞の殆どは活動動詞であると言える。また、コーパスで「-たまま」との共起が観察された感情動詞（「戸惑う」「失望する」「怒る」「困惑する」）は到達動詞と考えられる。

注意すべきは次の2点である。まず、本稿では、付帯状況を表す形式との共起を考察し、感情動詞の時間的性質を分析したが、付帯状況を表す形式との共起に注目するだけで感情動詞の時間的性質を記述できると主張しているのではない。感情動詞の時間的性質を明らかにするために、副詞的成分としての用法も考慮に入れるのが有効であると考えているのである。

また、本稿では「BCCWJ」を利用して共起制限を考察し、感情動詞と「-たまま」は相性が悪いことが判明したが、共起例がコーパスにない場合、当の感情動詞は「-たまま」と共起しないものとは断言できない³²。コーパスのサイズや種類（書き言葉コーパスか、話し言

³¹ 三宅(1995)では、森山(1988)の概念を利用して動詞の表す事態の局面を説明している。森山(1988)によれば「過程」「維持」「結果持続」のいずれの局面を持つ事態は「持続的なもの」として捉えられる。「過程」とは動きが運動として展開すること、「維持」とは動きの結果の保存が主体的に行われること、「結果持続」とは動きの結果が持続的であることを表すものである。例えば、「歩く、歌う、泣く、騒ぐ」などは「過程」、「座る、黙る、持つ、貸す、借りる」などは「維持」、「酔う、忘れる、出す、無くす」などは「結果持続」を持つ事態を表す動詞である。

³² コーパスと言語の例外性・周辺性については田野村(2004)、滝沢(2007)を参照のこと。

葉コーパスか)により、用例の出現頻度が変わる可能性があるからである。各形式が共起できるかどうかを確認するためにより大規模なコーパスや異なる種類のコーパスを調べる必要がある。

6. 今後の課題

以上、付帯状況を表す「-ながら」「-たまま」との比較を通して感情動詞「て」形の特徴を見た。また付帯状況を表す形式「て」「-ながら」「-たまま」との共起制限を通して感情動詞の語彙的特徴を見た。本稿の最後に今後の課題を述べる。まず前述のように、副詞的成分としての用法に注目するだけで感情動詞の時間的性質を捉えることはできない。また付帯状況を表す形式と共起するかどうかを確認するために異なる性質を持つコーパスを用いる必要がある。これらの問題を今後の課題にしたい。

参考文献

- 内丸裕佳子(2006)「動詞のテ形を伴う節の統語構造について—付加構造と等位構造との対立を中心に」『日本語の研究』2-1、1-15
- 加藤陽子(1995)「テ形節分類の一試案：従属度を基準として」『世界の日本語教育』5、209-224
- 神尾昭雄(1990)『情報のなわ張り理論』大修館書店
- 金水敏(1991)『『報告』についての覚書』仁田義雄(編)『日本語のモダリティ』くろしお出版、121-129
- 金水敏(2000)「第1章 時の表現」『日本語の文法2 時・否定と取り立て』岩波書店、1-92
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト』ひつじ書房
- グループ・ジャマシイ(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 高淑恩(2012)「動詞の意志性を問う—可能形式との関わりを中心に」『日本語文法』12-2、111-127
- 国立国語研究所(1985)『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀

英出版

- 三枝令子(2011)「感情を表す動詞『困る』が示すテンス・アスペクト」『一橋大學国際教育センター紀要』2、13-22
- 佐藤直人(1997)「日本語のナガラ節の意味と位置の相関」『言語科学論集』1、63-74
- 滝沢直広(2007)「巨大データの必要性：言語の周邊的・慣習的側面を探るために」『言語』36-7、34-41
- 田野村忠温(2004)「周辺性・例外性と言語資料の性格—その相関の考察」『日本語文法』4-2、24-37
- 寺村秀夫(1973)「感情表現のシンタクス—『高次の文』による分析の一例」『言語』2-2、大修館書店、98-106
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 長野ゆり(1995)「カットスルとカットナル—感情表現の動詞の主体の人称—」『日本語類義表現の文法(上)単文編』くろしお出版、99-108
- 成田徹男(1983)「動詞の「て」形の副詞的用法—「様態動詞」を中心に」『副用語の研究』明治書院、137-158
- 仁田義雄(1988)「意志動詞と無意志動詞」『言語』17-5、大修館書店、34-37
- 仁田義雄(1995)「シテ接続をめぐって」『複文の研究上』くろしお出版、87-126
- 仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 仁田義雄(2004)「意志性から見た主語」『言語』33-2、大修館書店、41-49
- 仁田義雄(2010)『語彙論的統語論の観点から』ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会(2008)『現代日本語文法6』くろしお出版
- 馬場典子(2001)「感情動詞のテンス・アスペクトについての一考察—怒りを表す動詞(句)の場合」『言葉と文化』2、109-124
- 馬場典子(2002)「『腹が立つ』の動機付けに関する一考察」『言葉と文化』3、31-44

- 坂東美智子・松村宏美(2001)「第3章心理動詞と心理形容詞」影山太郎(編)『日英語対照動詞の意味と構文』大修館書店、69-97
- 堀川智也(1992)「心理動詞のアスペクト」『言語文化部紀要』21
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法一改訂版』くろしお出版
- 町田健(1989)『日本語の時制とアスペクト』アルク
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.
- 三原健一(2000)「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」『日本語科学』8、国立国語研究所、54-75
- 三原健一(2004)『アスペクト解釈と統語現象』松柏社
- 三宅知宏(1995)「～ナガラと～タママと～テー付帯状況の表現一」『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版、441-450
- 宮島達夫(1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所報告44、秀英出版
- 村木新次郎(2006)「『-ながら』の諸用法」『日本語文法の新地平3 複文・談話編』くろしお出版、1-23
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 山岡政紀(1998)「感情表出動詞文の分類と語彙」『日本語日本文学』8 創価大学日本語日本文学界、1-17
- 山岡政紀(2000)『日本語の述語と文機能』くろしお出版
- 吉田妙子(1997)『テ形の研究—その同時性・継時性・因果性を中心に』大新書局
- 吉田妙子(2012)『日本語動詞テ形のアスペクト』晃洋書房
- 吉永尚(1997)「付帯状況を表すテ形動詞と意味分類」『日本語教育』95、73-84
- 吉永尚(1998)「心理動詞の意味的統語的観察」『日本語・日本文化研究』8、大阪外国語大学日本語講座、109-118
- 吉永尚(2008)『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』和泉書院